子どもの目で世界を見てみよう

― 哲学・倫理学の魅力 ―

伊　東　俊　彦

私は、相模女子大学の人間心理学科で「哲学」や「倫理学」に関わる科目を担当しています。人間心理を学ぶ学科で、なぜ「哲学」「倫理学」といった科目が設置されているのでしょう。それにそもそも、「哲学」「倫理学」とはどういう学問なのでしょう。この小文では、私が専門的に研究している領域についても触れながら、「哲学」「倫理学」とはどういう学問なのか、そしてそれが人間心理を学ぶ上で、どのように視野を広げてくれるものなのかを説明したいと思います。

1．哲学・倫理学とは？

哲学や倫理学とはどういう学問なのでしょうか。哲学は、紀元前７世紀にギリシアのイオニア地方（現在はトルコ領）に生まれた営みです。日本語で「哲学」と翻訳されることになったギリシア語philosophiaは、「愛」を表すphilo、「知恵」を表すsophiaが合わさってできた語で、「知恵を愛すること」を意味しています。私たちは、日々の生活を送っているときには、目先のやらなければいけないことに追われて、慌ただしく生きています。でも、そんな中でふと立ち止まって、これはいったいどういうことなのだろう、とあれこれの物事を疑問に思い考えてみようとすることがあるかもしれません。そんなとき、知恵を獲得しようとする「哲学」の営みが始まります。

例えば、哲学的な問題の一つに「人生の意味」という問題があります。私たちは、普段生きているとき、「自分は何で生きているんだろう」なんて考えません。でも、それをあえて問うてみることは出来ます。考えてみれば、私たちはあと100年もすればこの世からいなくなるのです。それを思うと、今あくせく努力していることに何かしらの空しさを感じ、本当に意味があることは何なのか、自分の存在の意味は何なの

か、といったことを考えてみたくなることは出てくるかもしれません。[1]

こういう問いを、人によっては「中二病」的だと冷笑するかもしれません。訳知り顔の大人なら、「人生の意味なんて、人それぞれだよ。それぞれの人がその人なりに納得して生きていけばそれでいいじゃないか」などと言うかもしれません。実際、こうした問いは何か一つの答えが出るようなものではないのですから。でも、だからといって、なぜそうしたことを考えてはいけないのでしょう。そして、「哲学」は、あえてこうした、ある意味では子どもっぽい物分りの悪い問いにもとことんまで付き合ってみようという学問なのです。

このことは「倫理学」でも一緒です。「倫理学」は、一言で言えば、善い生き方とはどういう生き方か、とか、やっていいこと・やってはいけないことは何なのか、などといった、人間にとっての生き方や行動の「善さ」を探求する学問です。それにしたって、やっていいこと・やってはいけないこと、こんなことは、普通に生きている常識的な大人なら判断できそうなことのように思えるでしょう。しかし、子どもは違います。「人には親切にしなきゃいけないよ」「どうして？」「そうすれば、あなたも親切にしてもらえるのよ」「なんでそうなるの？」。こんな子どもの「どうして？」「なんで？」攻撃に会うと、人はうんざりしてしまうかもしれません。でも「倫理学」は、その「どうして？」「なんで？」の問いにともかくも付き合ってみようとする学問なのです。

こんな子どもっぽい物分りの悪さに「知恵」という言葉を冠するのはおかしいのでは、という反論が出てきそうです。無論、子どもっぽい屁理屈を言い募るだけでは、それは学問とは言えないということはよくおさえておかなければなりません。しかし、「哲学」や「倫理学」は、こうした答えのない問いに付き合うことを通じてのみ辿りつける人間や物事についての理解の深まりがあると考えます。そして、こうした問いを筋道立てて考え、自分の考えが、ただ単なる独りよがりの思い込みにならないように、自分の考えに納得できる語り方を与えていくことをしようとするのです。

要するに、「哲学」や「倫理学」というのは、子どものように、「なんで？」「どうして？」と問い募ることを大いに許してくれる学問です。物分りの悪さは大いに結構、大学生

---

[1] もし、代表的な哲学の問題への簡単な紹介を見てみたい場合には、トマス・ネーゲル『哲学ってどんなこと？　―とっても短い哲学入門』（昭和堂）を手に取ってみてください。「人生の意味」という問題も、この本にもう少し詳しい紹介が出てきます。

になったのだからもっと大人にならなきゃなどと考える必要はありません。むしろ小さな子どものように、物事をいつもとは違う目線で眺めることへと人を誘ってくれるものなのです。どうです、面白そうでしょう。

２．私の専門領域のこと

私の専門は社会哲学で、19世紀から20世紀にかけてのフランスの社会思想、特にアンリ・ベルクソン（1859－1941）という哲学者の思想を専門的に研究しています。このように、自分とは時代も場所も違う所に生きた人との対話を可能にしてくれるのも哲学や倫理学を学ぶ魅力の一つなのですが、とはいえ「社会哲学」といわれると、何か堅苦しい社会の仕組みのお勉強のように思え、場合によっては自分とは縁遠い世界の話と感じる人もいるかもしれません。実際、大学の授業で学生と話していたりすると、あれこれの場面で自分の周りの他人の行動や反応は大いに気になるにもかかわらず、そうした他人たちが集まってできているはずの社会なるものには関心が持てない、という反応に出合います。（なんでこんな感じ方をしてしまうのかという事自体も、実のところ重要な哲学の考察の対象だったりするのですが。）でも、今は、私たちの日常のふとした一コマでさえ、社会についての哲学的思考へと誘ってくれることをお話ししましょう。

例えば、あなたがおしゃれをして外出し、ウキウキした気分で颯爽と町を歩いているところを想像してください。そんな浮き立った気分で気もそぞろになって、道の真ん中でつまずいて盛大に転んでしまったとしましょう。周りの人のクスクスと笑う声が聞こえてきそうです。何事もなかったかのように起き上がって服を払って歩き出すのですが、心の中ではちょっと泣きそうです。ちょっと恥ずかしいですが、まあなんてことはない日常の一コマともいえるでしょう。でも、先に述べたベルクソンという哲学者は、こうした場面で生じる笑いを分析し、一冊の本を書いてしまいました。[2]

なぜ私たちは、道で転んだ人を笑うのでしょう。その人が例えば病気なりなんなりで転んだりよろめいたりする十分な理由があったら、人はその人を笑うだろうか、とベルクソンは問います。その場合、転んだ人は心配や同情の対象になるだけでしょう。では、転んで笑われる人は何を笑われるのか。普通の人なら転ばないところで、理由なくただ不注意や不器用さから転んでしまうそのいかにも不如意な振る舞いが人にお

---

[2] H. ベルクソン／S. フロイト『笑い／不気味なもの』（平凡社ライブラリー）。

かしみを誘うのだ、こんなことをベルクソンは言うのです。そして、ここに、日常のふとした一コマを社会についての哲学的考察へと接続していく接点が現れています。

笑われることは人にとって恥ずかしいことですから、笑われた人は、今度は転ばないようにと自分の中でいましめにするかもしれません。つまり笑いは、周囲の人から向けられたその人への軽い懲罰の側面があるわけです。そうすると、ここには、人間の不注意や不器用さを我知らずいましめてしまうという社会というものがもつ一性質が現れてきているとも分析していくことが出来るわけです。

無論、これは笑いという複雑な現象のほんの一面を見たにすぎません。ただ、このように、日常の一コマを糸口にしながら、それを通じて透かし見える人間や社会のあり方を経巡ってみること。これは、それを通じて人間や社会についてのより掘り下げられた理解や知恵へと人を促しうるものなのです。実際、私の授業の学生の中には、彼氏の携帯電話を盗み見ていいのかどうかという問題から、プライバシーについての考察に向かった学生もいます。うまく友達と話せないという悩みから、そもそもコミュニケーションとは何か、という原理的な思考へと導かれた学生もいます。

このように、「哲学」や「倫理学」においては、考える仕方を工夫しさえすれば、どんなことでも、人間や物事についての理解の深まりとしての哲学的考察につながります。そしてその中にはもちろん、私たちにとって常に大きな関心の対象である人間の心理に関わる問題も含まれます。ぜひ皆さんも、小さな子どもの目になって、人間や物事を違った見方で眺める、そんな「哲学」や「倫理学」の営みへと促されてみませんか。そこでは、思ってもみなかった新たな世界が皆さんを待っているに違いありません。